元気 地域から情報発信

地域の特性を生かす―里山ものづくり塾

乾いた音とつやがとても良い竹炭

地域の中で自分に出来ること

菅福地区では「地域の中で自分たちに出来ることから情報発信しよう」と里山ものづくり塾（西村文作代表）を結成し、地域の特性を生かした物作りに励んでいます。

メンバーは、同地区60歳以上の9人で、気の合った仲間たち。現在は炭焼きに挑戦しています。

すべて自分たちの手で作りあげる

炭作りは昨年12月から始め、現在で5回目になります。窯（かま）や作業小屋も全部自分たちで製作。メンバーの中で、窯を以前に作ったことのある稲田茂さん指導のもと、約1か月かかって幅1メートル60センチ、高さ1メートル50センチ、奥行き3メートルの窯を作り上げました。稲田さんは「約40年ぶりです。昔を思い出します」と話していました。

近くの山で材料を調達された窯

材料は主に竹を使用

始めはナラの木と竹を材料に作っていましたが、今は竹炭を主に作っています。

最近は、地域に山林手入れの担い手が少なくなり、手を入れない竹やぶが増え、里山を荒廃させています。このため、山林整備も兼ねて竹を材料にしています。

竹炭は、小さな孔（穴）が無数に開いていて、有害な物質を吸いとってくれます。さらに、マイナスイオンを多く発生し、ミネラルも豊富に含んでいます。脱臭力、抗菌力にも優れています。

炭作りは、窯に竹を入れてから6日間焼き続けます。その後、約3日間冷えるのを待って窯を開けます。完成した竹炭は、乾いた音とつや、手に持っても汚れがつきにくいのが特徴です。

窯の中で灰にまみれながら作業するメンバー

情報発信して地域の活性化につなげたい

今のところ月1回、約350キロの竹炭が作られています。注文もすでに受けており、さらに良いものをと、焼く時間を調整するなど試行錯誤中です。西村さんは「炭と町のすばらしさを情報発信して、地域の活性化につなげていきたい」と話していました。